

連載企画—音響学の温故知新—

大阪万博とシュトックハウゼンの思い出*

柳田 益造 (同志社大学理工学部)**

43.10.Eg; 43.75.Wx

あらまし 筆者は、修士時代に大阪万博（1970年）の期間中、西ドイツ館オーディトリウムでミキサーを務めた。そこで生演奏を行っていた Karlheinz Stockhausen（1928.8.22-2007.12.5）とその音楽についての思い出を書かせていただく。

1. 西ドイツ館オーディトリウム

西ドイツ館 [1] は万博敷地の南辺にあり、そのオーディトリウムは、ベルリン工大の Fritz Winckel 教授が音響設計したもので、直径約 30 m の球形の建築物で、表面は 1 辺が 3 m くらいの正 3 角形の濃紺の板で覆われていた。

聴衆は球内部の下から 1/3 くらいの高さのところに水平に設置された金網の広い円形フロアの中央へ地下の展示室からエスカレータで上がってきて、その面に同心円状に置かれたクッションに座るようになっていた。最大 200 人くらいが座れるようになっており、調整卓は聴衆フロアから 1 m ほど高いステージに設置されていた。

球形ドームの底にサブウーファを置き、ドーム内面に 1 セット当たりウーファ、スコーカ、トゥイータで合計 13 個のスピーカ群を組み込んだ 3 角形のユニット 50 セットをドーム内の壁面にほぼ均等に配置し、それを 7 チャンネルで駆動するようになっていた。

生演奏用として、一つのチャンネルの出力スピーカを演奏中に手で切り替えられるように、回転ハンドル付きの可変接続器があって、これで駆動スピーカをフェード・アウト/インし、音像を空間的に滑らかに移動（特に回転）させることができるようになっていた。これは“Raum Musik”（空間音楽）の具現のために、彼自身が Winckel に要請したものである。卓には正弦波・鋸歯状波・矩形波・白色ノイズなどの発生器のつまみや各種変調

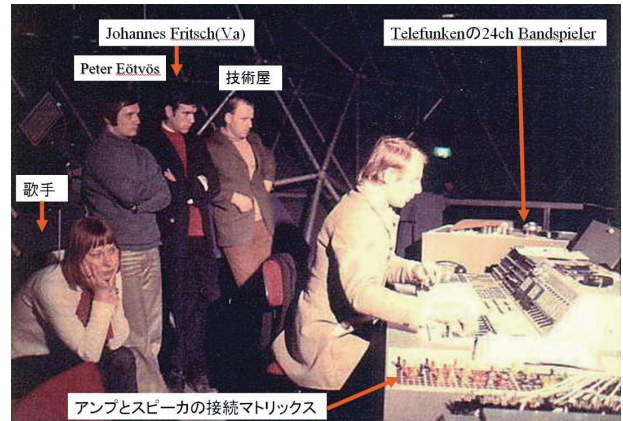


図-1 西ドイツ館での Stockhausen とその取り巻き音楽家たち

器やフィルタのスイッチやダイヤルが付いていた。

2. シュトックハウゼンの生演奏

Stockhausen は、上述の装置を使って、主に“Spiral”（シュピラル、螺旋）を演奏していた。音像を周囲の壁面に沿って回転させるのに、上記のハンドル付きの可変接続器がツールとしてフルに活用された。Spiral の演奏としては、当時まだ無名であった Johannes Fritsch（1941-2010）がヴィオラを弾いていたのが特に印象に残っている。彼は、万博後、名前を上げていった。もう一人、後に Boulez の後を継いで IRCAM の Ensemble Inter-Contemporain を率いたり、作曲家として名を上げ、また BBC 交響楽団の指揮者となるなど、音楽家として大な存在となった Peter Eötvös（1944-。ハンガリー語では Eötvös Péterrel）の若き日の姿があった。ただ、彼が楽器を演奏しているのを見たことがなく、機械いじりばかりしていたので、私は彼を技術屋さんだと思っていた。

Spiral は、奏者一人で、楽器一つ（楽器の種類は何でもかまわない？）とたしか短波ラジオ（“Tele-musik”でも使用）を操作し、Stockhausen が調整卓で出力スピーカの選択と、発振器や変調器な

* Memories of Expo'70 Osaka and Stockhausen.

** Masuzo Yanagida (Doshisha University)

どを操作するという形であった。奏者の近くにマイクを置いていた。ヴィオラ以外の楽器としては、フルートと金管楽器（トロンボーンだった？）を使っていたが、奏者名は記憶にない。ときには声（メゾ・ソプラノ？とバリトン？）も使っていた。

Spiral 以外には、薄暗いライトの周りに歌手数人が車座に座り、歌詞なしで、ほとんどハミングのような声（音？）だけで歌う“Stimmung”（シュティムンク、調律）が多かった。これはいろいろな発声法で声とも音とも判別できないような音を数人が連続でほとんど一定音高で出し、その複数の声の音色の混合効果とその時間変化の効果を聴かせる、というような種類のモノであった。

ピアノの Aloys Kontarsky が会期後半に加わったが、夜に彼が一人で、会場の Bechstein で、“Klavier Stuck”の何番か、あるいは“Kontakte”らしい曲を弾いているのを一人でこっそり聴いたときの印象が強く、昼間、聴衆の前で彼が何を弾いたのかの記憶は全く残っていない。

3. 鉄鋼館とのジョイント演奏会

会期の半ば頃、西ドイツ館にいた演奏家と鉄鋼館に来ていた演奏家でジョイントコンサートをすることになり、鉄鋼館でそれをやることになった。数人の演奏家が300mほど離れた鉄鋼館へ行くことになり、演奏家自身は歩いていくが楽器などは事務局の作業員が電気自動車で運んだ。作業員に頼み忘れたものを演奏会直前に私が運ぶことになった。ゴッタ返す会場内を、ゴルフ場のカートのような電気自動車に荷台車を一つだけ繋いでノロノロと運転したのを覚えている。コンサートの内容については、全く記憶がない。

4. Stockhausen との会話

Stockhausen には、こちらから声をかけにくかった。当時の音楽界で Stockhausen があまりにも大きな存在であったので畏れ多く、また、西ドイツ館のホステス（当時はコンパニオンのことをこう呼んでいた。）が彼としゃべる場合はすべてドイツ語であったという環境で、下手な英語で声を掛けるには抵抗があったのである。

唯一覚えているのは、前節の鉄鋼館とのジョイントコンサートに際して作業員の運び残しを鉄鋼館へ運ぶように彼から指示されたときである。「ケルンのスタジオのことを訊いてもいいか」と切り出して、Herbert Eimert との関係とか、Meyer-Eppler によるサポートなどについて簡単な質問をした。数分間の短い会話であった。

5. Stock と取り巻き奏者の顔

Stockhausen 自身は、彼が主唱する“Raum Musik”を具体化するために Winckel が作ってくれたオーディトリウムで、“Spiral”を思いっきりいろいろな形で披露できる、ということで、意気揚々と乗り込んできた、という感じがしたが、取り巻き連中はあまり頑張る気がなかったように感じられた。

Stockhausen は、自分が、一時は音楽の中心であったドイツの出身であること、並びに Schönberg, Berg, Webern の後を継ぐ立場にいる人間であるということを、自覚していたであろう。

そういうこともあって、Stockhausen は、ドイツ流の音楽を無理してでも推し進める義務感のようなものをもっていた。でもそれは彼の立場がそうさせるのであって、他のメンバにはそれがなかった。その差が取り巻き連中の表情に出ていたと思う。彼らは明らかに「こんなのをやっていいのかなあ」という表情であった。

謝 辞

40年以上も前のバンパクの思い出を書く機会を与えて下さった国立音大森太郎氏にお礼申し上げます。

文 献

- [1] 柳田益造, “1970 年大阪万博のシュトックハウゼン—西ドイツ館スナップショット—,” 先端芸術音楽創作学会会報, 2(3), 13-20 (2010).

柳田 益造

1969 年阪大・工・電子卒。71 年同修士了。同年 NHK 入局。78 年阪大博士了。工博。同年阪大産研助手, 87 年郵政省電波研究所（現 NICT）音声研究室長等を経て, 94～2012 年同志社大・理工・教授。現在, 同名誉教授。2004 本会佐藤論文賞・06 年電子情報通信学会ソサイエティ論文賞受賞。2001～05 年本会理事, 02～03 関西支部長, 06～10 年音楽音響研究会委員長。